

『勉強をし続けるということは』

自分が中学生だった頃から45年以上の年月が過ぎた。中学生になったとたんに「高校合格のために勉強せよ」という言葉を浴びせられ常に母親から尻をたたかれていた。当時住んでいたところは、30数世帯におよぶ父親の会社の社宅であったために、高校受験失敗は恥ずかしいことと世間体を大いに気にする親はびしびしと圧をかけてくる。

私は兄弟の中で一番出来が悪く家庭学習など大嫌いだったから「このままでは高校進学は無理」と家族から集中砲火を浴びせられていた。テレビを見たくても見せてもらえず、トイレ、入浴、食事時以外は机に向いていなければならないのである。かといって、その間きっちりと勉強しているわけでもなかったが……

中学校で行われる定期テストの度に、合計点数による学年での番数が出され、中1の時からそのことが悩みの種だった。上の兄弟や近所の情報から、常に何番以内でないと合格できないなどと、その順番が大きな目安になる。したがって、勉強の目標はいつもよい番数でありそれが全てであった。

そういう状況の中、何のために勉強するのか、自分が何をめざそうとしているのかをじっくり考える隙もないまま、受験地獄に埋没していくのであった。まあ受験地獄といっても、自分の場合は、それほどレベルの高い次元での話ではなかったが……

高校に入ると、次は大学受験だ。親は「現役で国公立大に入ると、年間1万2千円の授業料で済むから頑張れ」と本人の意向はおかまいなしにまたまた圧をかけてくる。しかし、中学での勉強と違い高校での勉強は、頑張ったから必ず成果が出るとは限らない。しかも、国公立に合格する者はほんの一握りである。これまた高い壁が目の前にそびえ立ち、前途多難でお先真っ暗な高校生活が始まる。

とにかく尻をひっぱたかれながらの勉強は、苦しさが優先し、ただ単に親の面目のために頑張れるかということと長続きするわけがない。本来の自分の目的、目標が定まらないまま点数を採ることのみに時間と労力を費やすことに一体何の意味が見い出せようかという思いで高校時代を過ごした。

教員になってからは、受け持った子どもたちの学力をどう保障するか、これがテーマであり、親にせかされていやいや勉強していた中高生の頃と違って立場が逆転する。

学校とは、集団生活の場であり、様々な学校行事もあり、健全な心や体を成長させるところであるが、やはり何と言っても、その学年で備えるべき学力を子どもたちに身に付けさせることが学校の大きな役割の一つであると考えます。

さて、自分が若かった頃の学習指導についてどうだったかというと、けっして褒められた授業とは全くなっておらず、今振り返ってみても、その当時子どもたちにはすまない思いでいる。当時は懸命に授業に臨んでいるつもりであっても、子どもたちに教えたことが積み重なってなくて、テストを採点する段階でそのことを思い知らされる。自分の教え方のどこに原因があるのかと常に考え、教師として本気で勉強しなければと改めて気づく。しかし、いくら勉強したからといって自己流の授業には限界があり、どこをどうしなければならぬのかともがくことがしきりであった。今日勉強して明日から思い通りになるといったあまいものではない。当然、先輩教師から学んだり、研究会に参加したり、関係する書物を読んだり、自分の職責を全うするための勉強に精を出さねばならない。それは、目的意識もないまま点数を上げるための受験勉強に取り組んだことと違い、その職業に就いた者の宿命であり、目の前にいる子どもたちの成長に責任を負う教師としての当然の勉強なのである。やりたくないとか面倒くさいなどは許されない。

教師という職業に就いてからの勉強は、職務として当然のことであり、定年退職するまで続いた。教師以外の仕事も同様で、勉強なしでは職務の遂行が不可能となるであろう。

子どもたちの「何のために勉強するのか」という問いについて、一言で子どもたちに納得させられる答えを返すことはとても難しい。「勉強しなければ、後で困るよ」という答えだとしたら、私の中高時代と同じである。勉強し続けることの原動力となるのは、意欲だと考えている。意欲を持つことは動機づけと深く関連する。

授業に入る時に、その時間で何を勉強するのか、何を考えるのか、それがどう役立つのか、どう必要なことなのかなどを説明しながら、めあてを示すように努めていた。指導内容によっては、それをうまく説明し、納得させるのが難しいこともあったが、子どもたちには学習する動機付けを図り、理由をわかってもらいたかった。しかし、そのくり返しだけでは、学習への意欲を持続させることは不十分である。やはり、学習内容をしっかりと理解させること、できるようにさせること、そして、わかる、できる喜びを味わわせることが勉強を続けようとする気持ちを持たせるために不可欠なことである。

今年度の全国学力・学習状況調査の結果から、「算数が好き」と回答した児童が多かったことと「国語が好き」と回答した生徒が多かった。いずれの教科とも全国平均を上回る正答率となっている。このことに着目すると、わかること、できることを大切にした授業などの取組が功を奏したと言える。

学校においてはこれからも、子どもたちが「好き」「楽しい」と言える学習指導や授業実践を積み重ね、子どもたちが、生涯にわたって勉強し続けようとする意欲を培ってほしい。